

大学職員の「職員先生」体感プログラム
—学部教育での実践報告—

An Experiential Teaching Program by University Staff: A Report on Its
Implementation in Undergraduate Education

高橋 真義

TAKAHASHI Shingi

キーワード： 「職員先生」、教育支援力、「学生教職員三輪車論」、母校愛の向上

要旨

大学の新たな学びの組織力をいかに高めるか。筆者（以下、「高橋」という）は、激動する時代を生きる大学のあるべき組織体制として、「大学学生教職員三輪車論」を提唱している。大学の主役である学生を三輪車のこぎ手とし、教員と職員は学生を支援する後輪の役割を担い、学生の可能性を引き出す同志と位置づける。教員は学生を教育する「教員力」を持ち、職員は学生を支援する「教育支援力」を発揮し、教員と職員がパートナーシップを保ち、三輪車の後輪がバランスよく回る状況を作り出す。前輪の学生は自らの意思により方向を定め、可能性を発揮しながら充実した大学生活を送ることが可能となる。

大学は、スタッフ・ディベロップメントの義務化により、教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、大学の教職員に対し、能力及び資質を向上させる研修の機会を設けるなどの取組が必要となった。職員は、経営的側面だけでなく、教育についても無関心であってはならず、学生を支援することにおいては、教員と同等の役割を担わなければならない。

大学職員の「教育支援力」の向上を目的とし、「大学と現代社会」において職員が「職員先生」として登壇し、授業をおこない学生と向き合う「場」をプロデュースした。職員は「教えることは学ぶこと」の意味を再認識し、教育に携わる自覚を高め、教員と学生についても認識を新たにした。学生は、「職員先生」の授業により愛校心を高め、大学生活や学び、将来についてポジティブな捉え方をすることができ、自信を強めた。

大学職員の役割の重要性を探るために「職員先生」の実践事例を整理して報告する。

1. はじめに

「職員先生」は、2007年から2015年までの秋学期、桜美林大学の共通科目特別講座・社会科学基礎「大学と現代社会」において、学生に大学は教員と学生だけが構成員ではなく、職員の存在がなければならないことを認識させるために授業を担当した職員のことである。

大学職員が教壇に立つことにより、職員と教員とのパートナーシップの重要性を意識することも目的とした。

2. 「大学と現代社会」の授業について

「大学と現代社会」の授業は、桜美林大学での学部生を対象としたオムニバスの授業である。2006年度から2015年度におこなった授業について整理した。

(1) 2006年度

2006年度秋学期「大学と現代社会」（共通科目特別講義K）は、桜美林大学・大学院の専任教員がオムニバス形式で進め、月曜日と木曜日の週に2回、28回の授業をおこなった。高橋は、6回目の授業として「大学組織と職員1」、7回目の授業は「大学組織と職員2」をテーマとして担当した。

(2) 2007年度

①授業内容

2007年度秋学期「大学と現代社会」の授業は、大学院の大学アドミニストレーション専攻（当時）の教員4人がオムニバス形式で進め、月曜日と木曜日の週に2回、28回の授業をおこなった。2年生～4年生の学部生を対象とした。

高橋は最後の9回を担当した。テーマは「学生と学びを支える大学組織」とし、指定図書は創設者・清水安三先生遺稿集『いしころの生涯』である。授業の考え方は、大学は教員と学生だけが構成員ではなく、4年間の学生生活を有意義に送るためには、学びを支える大学組織と職員の存在なくして語れないことを学生に認識させること。全9回の授業を通して、桜美林大学という「学びの場」の主役は学生であることを自覚させ、「世界を翔る桜美林大学の学生＝オベリンナー」としてのプライドを醸成させる。教員と職員が力を合わせて、学生に大学を好きになってもらうために、「自校教育」の大学職員版へと発展することを視座に入れた。

表－1 2007年度「大学と現代社会」20回－28回と補講1回の授業内容

回	曜	テーマ	内容
1	木	高橋真義	学生と大学職員Ⅰ アンケート調査
2	月		学生と大学職員Ⅱ 〃 結果報告
3	木	学生と 学びを支える 大学組織	①桜美林大学のミッション学長室室長
4	月		②学びを支える大学組織 教務課
5	木		③ 〃 学生課
6	月		④ 〃 図書館
7	木		⑤ 〃 キャリア開発センター
8	木	高橋真義	私は世界を翔るオベリンナーになる
9	月		(まとめのテスト)

②学生へのアンケート調査

第1回目の授業前と最終授業に「大学職員についてのアンケート」調査をおこなった。回答した学生は2年生が2人、3年生が5人、4年生が7人の14人である。授業終了後の回答結果について以下に抜粋する。

職員については、「学生が学びや生き方、その後の進路などを作るための、相談役であり、指導者であり、傍観者、教える事は違うが大事に学生を見守ってくれている先生」の回答のように、存在を認識した記述の割合が増加した。「教員よりも学生に近く、学生との

関係を築ける人」「学生の事を真剣に考え、いつも新しい何かを想像し、企画実行能力、事後評価を冷静に行うことができる人」のように授業の最後は職員について具体的な内容の記述が増加した。

授業の感想は、「とてもいい授業でした。1年生の時に受ければ、だいぶ変わっていたと思います」「学校改革のためにこの授業を利用していくことが必要だと思った。もっと多くの学生が集まるようにしていけばいいと思います」など、ほぼ全員が授業の必要性を記述していた。

③「職員先生」へのアンケート調査

2008年4月14日～18日の期間、「職員先生」についてのアンケート調査を「職員先生」として登壇した6人に実施した。「授業を始めた時は、学生は授業を主体的に受けるという感じがなく、まるでファミリーレストランでオーダーしたものを待っているかのような雰囲気であった。しかし、授業の終わる頃には、興味も持ったのか椅子に腰掛けている姿勢が変わった」「自分の仕事が、『人を育てる』『よりよく生きる』という教育の側面の一端を担っているという意識を強くした」「学生の意見を聞き、業務改善につながる。改善後、学生サービスにつながった」「職員が教育現場での『職員』という立場での『教育者』という実感を持つことができる。どんな学生がいるか、学生がどんな考えを持っているのか、実際に体感することができる」等との記述である。

(3) 2008年度

①授業内容

2008年度秋学期「大学と現代社会」の授業は、大学院の大学アドミニストレーション専攻（当時）の教員2人がオムニバス形式で進め、15回おこなった。1年生～2年生の学部生を対象とした。高橋は全15回の最後の7回を担当した。2008年度の履修者は82人、学年の割合は1年生が62人、2年生が20人である。階段教室で授業をおこなった。

初回はガイダンス、2回目は総務課長、3回目はキャリア開発センター課長、4回目は国際交流センター課長、5回目はアドミッションセンター課長が「職員先生」として登壇した。この年度よりメーリングリスト（以下、ML）を用いて課題を提出・共有した。授業終了後に学生がリアクションペーパーをMLにアップし、「職員先生」は学生のリアクションペーパーにコメントを記入しMLにアップした。6回目は「世界を翔けるオベリンナー」のテーマで、決意表明を発表し、7回目はグループディスカッションをした。職員と母校についての2種類のアンケート調査を初回と7回目におこなった。

②学生へのアンケート調査

初回と7回目の最終授業において、「大学職員についてのアンケート」の調査をおこなった。

「職員についての捉え方が変わった」と回答した学生は45人・84.9%、変わらなかった学生は5人・9.4%、無回答は3人・5.7%であった。職員をより身近な存在として認識し、学

生のことを考えてくれていることに気づいた記述が増加した。

「どのような職員がよい職員だと思いますか」の質問において「学生を大切にして桜美林に誇りを持っている職員」のように、学生対応についての記述が大半を占めた。

③「職員先生」へのアンケート調査

2009年3月に「職員先生」として登壇した4人に調査した。

「教えることは学ぶことを体感」は全員が「大いにした」と回答している。

「学生についての感想・気づいた点」の質問では、「改めて多くの学生が自らの夢や目標をなんとなく持ちながらも、叶える行動には踏み込まず躊躇していることに気付かされた。同時に、その多くが具現化に向けた一歩を踏み出せずにいるだけで、頭や心の中では何かしなくてはと考えている層であることにも気付かされた。今後、教職員が最初の一歩を踏み出させるアプローチをどのようにさせるかが、学生の成長の大きな鍵を握ると考える」の記述があった。

「教育現場、日常生活などで役に立ちそうな点」の質問では、「積極的に学生に意義を語りかけるとともに、学生のニーズをくみ取っていかなければならない。学内の様々な機会に同様なことは行っているが、対象は関心層が中心なので底上げが課題だった。よってこのような非関心層を含むグループとのコミュニケーションの機会は今後も活かしていきたいと思う」などの記述があった。

(4) 2009年度

①授業内容

2009年～2015年度まで、秋学期「大学と現代社会」の授業は、大学院の大学アドミニストレーション専攻（当時）の教員2人がオムニバス形式で進め、15回おこなった。1年生～4年生の学部生を対象とした。

高橋は全15回の後半の7回を担当した。補講も1回おこなった。2009年度の履修者は23人、学年の割合は1年生が15人、2年生が7人、3年生が1人である。

表-2 2009年度「大学と現代社会」9回-15回と補講1回の授業内容

回	授業時間配分・アンケート項目	内 容
1	○高橋講義	大学・母校は誰が構成しているかを考える
2	○「職員先生」講義 30分	①桜美林大学のミッション 講義：中高事務長
3	○「リアクションペーパー」記入 10分	②学びを支える大学組織 講義：外事部外事課長補佐
4	○「グループディスカッション」30分	③ 〃 講義：生涯学習センター課長
5	○総括 10分	④ 〃 講義：キャリア開発センター キャリアアドバイザー
	○授業終了後、MLに学生がML版リアクションペーパーをアップする。 ○「職員先生」は学生の「リアクションペーパー」にコメントを記入しMLにアップする。	
6	○学生決意表明原稿作成	○テーマ「世界を翔けるオバリンナー」 ○アンケート調査
7	○グループディスカッション	○グループディスカッション「最高のありがとう」
8	○補講	○合同1日合宿

②初回の授業での配布物

初回の授業では学生に9種類の資料を配付した。授業ガイド、高橋講話のレジュメ、大学職員についてのアンケート、「丹田」についての新聞記事、週刊「東洋経済」に掲載された「職員先生」についての記事、「職員先生」についての大学教育学会発表要旨、「フリーター人口の長期予測とその経済的影響の試算」の資料、高橋が作成した「短い文章の書き方」である。

③学生へのアンケート調査

7回目に調査した「大学職員についてのアンケート」は20人の学生が回答した。「どのような職員がよい職員だと思いますか」の質問に、「学生とコミュニケーションが適切に計れて、理解しようと努める人」のように、学生対応についての記述が大半であった。

「職員についての捉え方が変わった学生」は16人・80%である。変わらなかった学生は1人・9%、無回答は3人・15%であった。職員が学生のことを思い仕事に励んでいることや様々な業務をおこなっていることに気づいた記述が増加した。

7回目に調査した「母校についてのアンケート」は18人の学生が回答した。「桜美林大学に『母校愛』を持っていますか」の質問では、「はい」は12人・70.5%、「いいえ」は6人・33.5%、である。「はい」とした理由は「この授業を履修して、桜美林大学のことをよく知り、力強い先生がいる」「就職活動のときに桜美林の学生であると思ったとき」など、大学での出会いや学びの意欲に加え、この授業がきっかけであるとの回答が多かった。「いいえ」とした記述は、「人間関係などのつながりはあるが、この大学だからこそというものはあまりない」などである。

④「職員先生」へのアンケート調査

2010年3月に6人の「職員先生」がアンケートに回答した。4件法の質問に、「教えることは学ぶことを体感」は3.6、「教えることは楽しかったですか」は3.6、「学生を見る眼が変化しましたか」は2.6、「教員を見る眼が変化しましたか」は2.8、「職員を見る眼が変化しましたか」は2.8、「あなたが「職員先生」を体感したことの満足度」は3.6の平均回答率であった。

「学生についての感想・気づいた点」の質問では、「授業で初めて学生さんを前にした印象は、素直そうで真面目そうで、だが何か不安そうで、自信なさそうな感じを受けた。授業前にそれぞれの課題の回答ペーパーに書かれていたものを読んだ印象とは違った。授業後のリアクションペーパーの学生さんの感想や質問の迫力には驚かされた」「最近の若者はネットでいくらでも知ることができるとのせいか、必要な時に、適宜メモを取ることをしないとっていた。しかし、今回のように授業のたびに資料があり、課題・提出物があるため、その場でメモを取る学生を多く見ることができた。聞いたことを消化し、自分なりのスタイルでメモの重要性を再認識した」などの記述があった。

「職場や日常生活に活かせる点」の質問では「桜美林スピリッツを常に持ち、失敗を恐れず、常にチャレンジしていくこと。当職場以外においても、必要なことである。常に学生

に見られている意識を教職員が持ち、常識ある大人、信頼される人間として行動しなければならないこと」などの記述があった。

(5) 2010年度

2010年度の「職員先生」は、3回目は総務部総務課、4回目は学生部学生課、5回目は外事部外事課の職員が登壇した。履修者は51人、学年の割合は1年生が48人、2年生が2人、3年生が1人である。

2010年度より、毎回の授業において学園歌を全員で合唱することとした。

(6) 2011年度

2011年度の「職員先生」は、3回目は総務部総務課、4回目は経営企画室、5回目は学生生活支援課の職員が登壇した。履修者は125人、学年の割合は1年生が59人、2年生が31人、3年生が15人、4年生が19人である。階段教室で授業をおこなった。

(7) 2012年度

2011年度の「職員先生」は、3回目は総務部総務課、4回目は経営企画室、5回目は地域連携推進室 同窓会・後援会連携室の職員が登壇した。2012年度の履修者は44人、学年の割合は1年生が36人、2年生が5人、3年生が2人、4年生が1人である。

(8) 2013年度

2013年度より、学生のコミュニケーション力の向上を目的とし、2回目に「自己表現・評価トレーニング」を実施した。「自己表現・評価トレーニング」を導入することにより、グループディスカッションにおいては活発な意見交換がおこなわれた。

2013年度の履修者は71人、学年の割合は1年生が44人、2年生が16人、3年生が10人、4年生が1人である。

①授業内容

表-3 2013年度「大学と現代社会」9回-15回と補講1回の授業内容

回	授業時間配分・アンケート項目	内 容
1	○高橋講義	大学・母校は誰が構成しているかを考える
2	○高橋講義	「自己表現・評価トレーニング」
3	○「職員先生」講義 30分	①桜美林大学のミッション 講義：入試広報センター
4	○「リアクションペーパー」記入 10分	②学びを支える大学組織 講義：経営企画室・図書館事務部
5	○「グループディスカッション」30分 ○総括 10分	③ 〃 講義：国際学生支援課
	○授業終了後、MLに学生がML版リアクションペーパーをアップする。 ○「職員先生」は学生の「リアクションペーパー」にコメントを記入しMLにアップする。	
6	○学生決意表明原稿作成	○テーマ「世界を翔けるオベリンナーになる-Ⅱ-」
7	○学生決意表明	○テーマ「世界を翔けるオベリンナーになる-Ⅱ-」 ○アンケート調査
8	○補講	○「自己表現・評価トレーニング」・「カード出し」

(9) 2014年度

2014年度の「職員先生」は、3回目総務部総務課、4回目は図書館、5回目は学生支援課の職員が登壇した。2014年度の履修者は85人、学年の割合は1年生が44人、2年生が10人、3年生が10人、4年生が21人である。

(10) 2015年度

2015年度の履修者は61人、学年の割合は1年生が32人、2年生が14人、3年生が10人、4年生が5人である。

① 授業内容

表-4 2015年度「大学と現代社会」9回-15回と補講1回の授業内容

回	授業時間配分・アンケート項目	内 容
1	○高橋講義	大学・母校は誰が構成しているかを考える
2	○高橋講義	「自己表現・評価トレーニング」
3	「職員先生」	①桜美林大学のミッション 講義：総務部
4		②学びを支える大学組織 講義：図書館
5		③ 〃 講義：学生相談室
	○授業終了後、MLに学生がML版リアクションペーパーをアップする。 ○「職員先生」は学生の「リアクションペーパー」にコメントを記入しMLにアップする。	
6	○学生決意表明原稿作成	○テーマ「世界を翔けるオベリンナーになる-Ⅱ-
7	○学生決意表明	○テーマ「世界を翔けるオベリンナーになる-Ⅱ-
8	○補講	○「自己表現・評価トレーニング」・「カード出し」

②学生へのアンケート調査

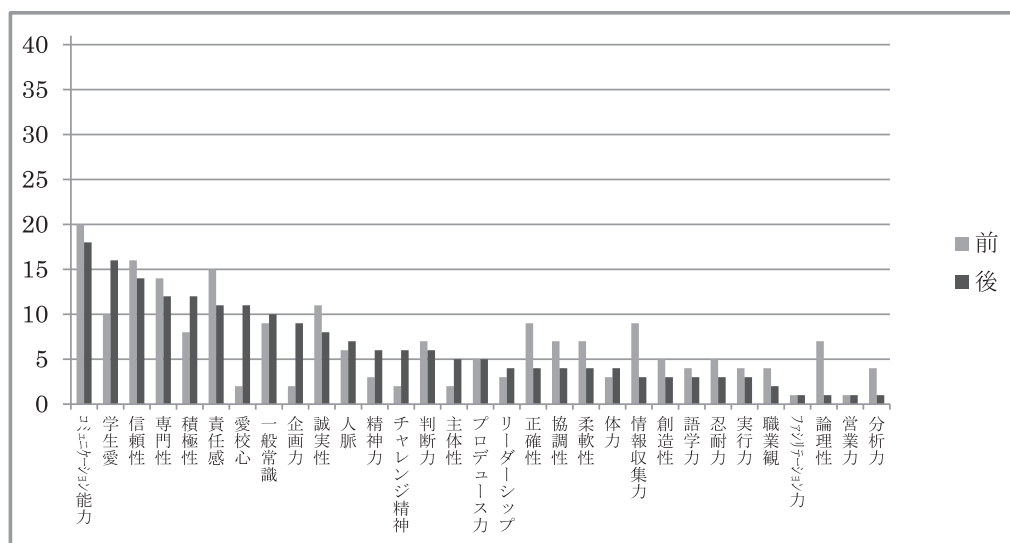
第1回目（2015年11月24日）の授業と7回目（2016年1月19日）の授業にて、アンケート調査をおこなった。2回とも回答した学生は1年生が25人、2年生が10人、3年生が3人、4年生が3人の41人である。

「大学職員に特に必要だと思う能力は何ですか」と31の能力の中から選択して丸をつけさせた。31の能力は、「専門性」「企画力」「積極性」「情報収集力」「誠実性」「創造性」「一般常識」「コミュニケーション能力」「人脈」「職業観」「精神力」「主体性」「ファシリテーション力」「語学力」「責任感」「チャレンジ精神」「判断力」「リーダーシップ」「論理性」「営業力」「プロデュース力」「信頼性」「分析力」「正確性」「協調性」「柔軟性」「愛校心」「学生愛」「忍耐力」「実行力」「体力」である。この31の能力については、2007年、桜美林大学大学院アドミニストレーション専攻（当時）の高橋真義ゼミの授業において、現役の大学職員に確認をしている。

1回目と7回目の回答数については「グラフ-1」に記した。1回目は「コミュニケーション力」「信頼性」「責任感」「誠実性」「正確性」「情報収集力」の順に選択数が多い。7回目は「コミュニケーション力」「学生愛」「信頼性」「専門性」「積極性」「責任感」「愛校心」の順となっている。1回目と比較して7回目の選択数が多くなっている能力は「学生愛」「大学愛」「積極性」「企画力」「精神力」「チャレンジ精神」「主体性」「リーダーシップ」「体力」である。特に、「学生愛」は10人から16人、「愛校心」は2人から16人、「企画

力」は2人から9人と選択数は多くなっている。この変化については、授業において「職員先生」として登壇した職員の「学生愛」や「愛校心」が学生に伝わったものと拝察する。このことにより、学生も「愛校心」が高まり、大学生を自慢できるようになる。学生生活や就職活動もよりポジティブになる。「企画力」については職員への期待でもある。

グラフー1 2015年度「大学と現代社会」職員に必要な能力について (n=41)



「どのような人がよい職員だと思うか」については、初回は「真面目に仕事ができる人」「流れ作業の仕事にならない人」「学生の相談に対して面倒くさがらずに真面目に対応」「確実な対応をする職員」「学生のことを考えて行動する職員」「学生とのコミュニケーションが取れる人」「笑顔が素敵で親身になってくれる人」などの回答であった。7回目は「学生愛がある」「話しやすく信頼出来る人」「学生と近い人」「教員と学生を思って行動出来る人」「学生の目指していることを助けてくれる職員」「一所懸命となり学校の環境を作ろうとする人」など、「職員先生」の授業から学んだことにより、職員のあるべき姿がより具体的になった。

7回目に調査した「母校についてのアンケート」について、「大学がどのような場であれば、あなたは桜美林大学への母校愛をもつことができますか」の問い、「教員、職員、学生の距離が近づくと良いと思う」「大学の歴史を教える」「この大学でなければ学べなかったみたいな経験が出来ればよい」などの記述があった。

7回目に「気づきアンケート」調査もおこなった。回収数は45であった。

「職員先生の授業から学んだことはありますか」の問いに、「全くない」「あまりない」「どちらともいえない」「ある程度ある」「とてもある」の5件法で選択をさせた。

「とてもある」と回答した学生の記述は、「学生一人ひとりが桜美林」「自分たちが思っていた以上に学生へのサポート精神が熱い」「人生の先輩として大切なことを教えてくれた」

「主に桜美林大学の歴史や仕組み」「当たり前のことを続けることで、道は開ける」「オペリンナーとしての自覚、自信がついた」などである。

表－5 2015年度「大学と現代社会」「職員先生の授業から学んだことはあるか」(n=45)

回 答	全くない	あまりない	どちらともいえない	ある程度ある	とてもある
回答数	0	0	3	14	28
割合	0	0	7%	31%	62%

「職員先生の授業を受けてあなたは変わりましたか」の問いに、「全くない」「あまりない」「どちらともいえない」「ある程度ある」「とてもある」の5件法で選択をさせた。

「とてもある」と回答した学生の記述は、「桜美林をもっと好きになった」「学生として大切にされていることが分かりました」「講義を聞いて自分に自信がもてるようになった」「学問以外の目線で授業を受けられるようになった」「大学の色々なところで働いている人をよくみるようになった」などがある。

表－6 2015年度「大学と現代社会」「職員先生の授業をうけて変わりましたか」(n=45)

回 答	全くない	あまりない	どちらともいえない	ある程度ある	とてもある
回答数	0	1	5	27	12
割合	0	2%	11%	60%	27%

「桜美林大学の学生であることを意識することによりあなたは変わりましたか」の問いに、「全くない」「あまりない」「どちらともいえない」「ある程度ある」「とてもある」の5件法で選択をさせた。

「とてもある」と回答した学生の記述は、「大学を活用して自分をつくっていくことが大切であると学んだ。なんとなく過ごしていた日々ではいけないと思った」「今まで卒業した中に有名な企業の方がいたりなど、自分もそこに続きたいと思います」「桜美林を嘆くより自慢できるようになった」「桜美林生であることに誇りをもてた」「桜美林生として行動するようになって責任感が芽生えた」などである。

表－7 2015年度「大学と現代社会」「桜美林大学の学生を意識して変わりましたか」(n=45)

回 答	全くない	あまりない	どちらともいえない	ある程度ある	とてもある
回答数	0	2	7	19	17
割合	0	4%	16%	42%	38%

3. まとめ

「学生教職員三輪車論」を具体化し、「FDとSDの融合」を探ることを視座に、2007年度より「職員先生」として大学職員が授業を担当した。

履修学年と履修者の数が異なる各年度において、学生を主眼にして授業を構成することにより、キャリア教育と初年次教育の要素を持つ授業が可能となった。

入学前から大学で学ぶ目的を持つ学生と不本意入学の学生では、大学生活の充実度には差異があるが、この授業を履修したことにより、学生は前向きに大学生活を捉えるように変化している。学生は大学の組織や職員の仕事についての認識を深めると共に、大学への愛着や帰属意識を高め、大学生であることの自信を強めた。また、自らの可能性についても大きく捉えることができた。

職員は授業を通して改めて教育機関で働くことの意義や、学生のための教育支援力についての理解を深め、大学職員が果たす役割について再認識をすることができた。職員は大学の強みを認識しており、学生の当該大学への帰属意識すなわち「母校愛」の醸成においては欠かせない存在となる。

「週刊東洋経済」2008.10.18の記事に対して、大学アドミニストレーション研究科教授寺崎昌夫は、「すばらしい試みで、職員の教員体感という研修は、多くの大学でも取り入れられるべき制度設計である」と評価した。

単位認定の問題、「職員先生」であっても教員資格審査をすべきではないかなどの意見もあった。また、授業時間が午後4時10分から5時40分であったことから、超勤が発生しない管理職に限られることなどの制約も少なくはなかった。

大学を取り巻く環境が大きく変わる中、9年間の「職員先生」体感プログラムの実践は、大学職員の役割の重要性を明らかにするものであった。

なお、「職員先生」の研究成果については、大学教育学会において、2008年次、2009年次、2010年次の大会において発表している。

問われる「品質保証」③

学生に熱く語れ！ 職員先生」活躍中

大学の構成員は教員や学生だけではない。職員が活躍するユニークな試み。



「職員先生」を紹介する高橋真義教授(右端)

秋 学期が始まった9月22日、教室に大きな声で響き渡った。「大学を構成しているのは教員と学生だけじゃない！」

声の主は、桜美林大学の高橋真義教授。「プロとしての大学職員」を養成する大学院・大学アドミニストレーション専攻の担当だが、今回受け持つ授業は学部生が対象。科目名

は「社会科学基礎(大学と現代社会)」だ。講義の前半は、同僚の鈴木克夫准教授が担当。大学とは何か、という基本的な概念を説明する。

高橋教授が受け持つのは後半。そこで取り上げる予定なのが、組織としての大学だ。特に重点を置くのが、大学職員の役割である。

「大学は学生が中心で、三輪車でいえば前輪。それを教員と職員という二つの後輪が支える。これが大学の本来のあり方」というのが、高橋教授の持論だ。

創業者の思いを 学生に伝える

授業では、実際に桜美林大の職員が教壇に立ち、所属部署の業務内容だけでなく、学生に対する自らの思いを語ることになっている。このユニークな試みに、高橋教授がつけた名前が「職員先生」だ。同プログラムは昨年初めて、高橋

教授が授業に取り入れた。「職員先生」を務めた石崎栄子・図書館事務長が振り返る。「授業に集まってきた学生を見ると、レストランで注文した料理を待っているような受け身の雰囲気だった。図書館の話をしようにと思っていたが、それを見て気が変わり、桜美林O.Gとして一言いたくなった」。

石崎事務長は、実は経済学部1期生。当時、「太平荘」という寮があった。創業者が海外の支援者に借金をして、ようやく寮建設にこぎ着けた経緯を語る資料が、その太平荘にあったという。

「いつ潰れてもおかしくないくらいに厳しい状況乗り越えてきた創業者の思い、大学の歴史を学生に語ることにした」(石崎氏)。授業が始まる前は、足を投げ出すような態度の学生もいたが、最後は熱心に耳を傾けていたという。

授業の前後でとった学生へのアンケート結果を比較すると、顔と名前が一致する職員の数が増え、その仕事内容に関する理解が深まった。昨年、「職員先生」の授業を受講した忍足あゆみさん(4年生)は、その感想をこう語る。「職員の方々と、人として接することができたのは初めて。貴重な経験だった」。

■「職員先生」が授業に登場

—桜美林大学「社会科学基礎(大学と現代社会)」の講義内容—

- オリエンテーション
- 基本概念の理解1「大学とは」
- 基本概念の理解2「大学の授業とは」
- 基本概念の理解3「日本の大学・大学院」
- 基本概念の理解4「大学と社会との接続」
- 基本概念の理解5「学位・資格・免許」
- 基本概念の理解6「まとめのテスト」
- 学生と学びを支える組織1「大学は誰が構成しているかを考える」
- 学生と学びを支える組織2「桜美林大学のミッション 総務課」
- 学生と学びを支える組織3「学びを支える大学組織 アドミッションセンター」
- 学生と学びを支える組織4「学びを支える大学組織 国際交流センター」
- 学生と学びを支える組織5「学びを支える大学組織 キャリア開発センター」
- 学生と学びを支える組織6「私は世界を翔るオペリンナーになる」

(注)2～7は鈴木克夫准教授、8～13を高橋真義教授が担当

今年の授業では、四つの部署の職員が先生を務める。その中の1人、キャリア開発センターの高原幸治課長は「チャレンジ精神を持って就職活動に臨むことの大切さを学生には訴えたい」と意気込む。

「職員先生」の経験は、職員にとっても自分の仕事を見つめ直すきっかけになる。実際に教壇に立つことで、教員への理解も深まる。大学では今、職員の能力開発(SD)スタツフ・デベロップメントが課題だ。「大学をよくするために職員は活躍が必要不可欠」(高橋教授)。「職員先生」は、SDに向けた一つの試みでもある。

引用（参考）文献

- 高橋真義, 2003, 「大学における新たなプロフェッションに向けて」, 大学コンソーシアム京都2002年度FDフォーラム報告書『学びのスクラム』245-248.
- 高橋真義, 2006, 「大学倒産回避のための原理原則を考える」『大学力』ミネルバ書房226-231.
- 週刊東洋経済, 2008, 「問われる『品質保証』3 学生に熱く語れ! 『職員先生』活躍中」2008.10.18: 94.
- 高橋真義, 2008, 「大学職員の「職員先生」体感プログラム」『大学教育学会年次大会要旨集』
- 高橋真義, 2009, 「大学職員の『職員先生』体感プログラム—初年次トレーニングの必要性の検証—」『大学教育学会年次大会要旨集』
- 高橋真義, 2010, 「大学職員の『職員先生』体感プログラム—初年次トレーニングの必要性の検証—」『大学教育学会年次大会要旨集』
- 高橋真義, 2011, 「大学学生教員職員三輪車論」桜美林大学大学アドミニストレーション研究科「Newsletter」8
- 朝日新聞, 2014, 「キャリアを切り拓く大学院・大学・通信教育2014」『社会人・大学生のための大学院・大学ガイド』34.